

## 東日本大震災医療支援活動報告

宮崎大学医学部附属病院薬剤部  
日本赤十字社宮崎県支部第6救護班  
平原 康寿

活動日程：2011年4月10日～4月16日

(実働期間：4月12日～14日)

活動場所：宮城県石巻市

(石巻赤十字病院を拠点とし、ショートステイベース (SSB) 救護所を担当)

\*SSB：入院を要する状況ではないが、避難所へ戻すよりしばらくの間、医療スタッフの下、経過観察を必要とする被災者を支援することを目的としている。

支援団体：日本赤十字社宮崎支部

救護班構成員：医師2名、薬剤師1名、看護師3名、主事3名

(この内、宮崎大学からは医師2名、薬剤師1名、看護師2名、主事1名)

### 【活動に至るまでの経緯】

まず始めに、今回の医療支援の参加にあたり、熱い御推薦と多くの御助言を頂きました宮崎大学医学部附属病院薬剤部 奥村学副薬剤部長に深く感謝申し上げます。また、薬剤部業務をサポート頂いた薬剤部の全スタッフに感謝を申し上げます。

宮崎大学医学部附属病院では、震災直後から救護隊の被災地への派遣が検討されていた。この検討において、薬剤部から奥村副薬剤部長が、救護隊の一員としての薬剤師の必要性を訴えられ、池ノ上病院長先生の御理解を賜り、また、救護隊派遣の責任者である伊達先生の御協力により、薬剤師の派遣が3月末の第3陣から現実となった。一方、薬剤部では、奥村副薬剤部長が救護隊への参加を募られ、数名の薬剤師が参加の意思を示した。

私自身も、災害発生当初から、薬剤師としてばかりではなく、1人の人間としても医療支援に対する貢献を強く願っていたため、奥村副薬剤部長のお考えに迷うことなく同調し派遣をお願いし、薬剤部から最初となるこの第3陣の一員として派遣していただくこととなった。

### 【活動日程】

4月10日(日)

16:10 発の航空機で東京入りし、その後日本赤十字社本社を訪問し最新の状況報告を受けた。4/10時点で、日本赤十字社が石巻赤十字病院を災害対策の拠

点として、石巻市、女川町、東松島市を統括していた。15 のブロックに区分けし、各ブロックに 4～5 チームの救護班が巡回診療や救護所で医療支援にあっていた。九州地区の第 6 救護班は当初 SSB を担当とあったが、本日の予定では旧北上川地区の巡回診療へ変更となった。(都内泊)

#### 4月11日(月)

JR にて栃木へ。日本赤十字社栃木支部より陸路、仙台へ向かった。仙台市に入ったあたりで、福島県浜通りを中心とする M7.1、震度 6 弱の余震があった(仙台市では震度 4 強)。高速道路を移動中、福島県に入った辺りから携帯に地震予報メールが度々入るようになり、余震後も数時間にわたり多くの揺れを感じた。(仙台市泊)

#### 4月12日(火)

仙台市から石巻市へ移動。都市高速道路を挟んだ海側と山側のエリアで津波の影響が明らかに違っていた。道路もかなり傷んでおり、50～80km 制限が強いであった。石巻赤十字病院到着後、現状把握と救護活動内容について確認を行なった。最終的に今回の救護活動は、SSB にて行なうこととなった。SSB では 2 交代制(日勤; 8:00-20:00)にて勤務対応した。午後からは被災地区を視察。その後 SSB にて、日本赤十字社医療センター(東京)と業務の確認を行ない、12日の20時より翌朝まで夜勤業務となった。[20時時点での SSB 滞在者は 4 名。主訴として、眩暈、肺炎。]

#### 4月13日(水)

前日から夜勤業務に入り、8:00 に福岡赤十字今津チームと交代。福岡チームには薬剤師の配置がなく、本部からの支援要請を受け福岡チームの一員として SSB にて引き続き夜 20 時まで医療支援を行なった。また、宮崎日赤チームは日中に南三陸町へ視察を行なった。[20時時点での SSB 滞在者は 4 名。主訴として、眩暈、肺炎、発熱。前日より変わりなし。]

#### 4月14日(木)

本日は宮崎日赤チームが SSB にて 8 時より日勤を行なった。また、20 時に大分日赤チームと引き継ぎを行なった。[20時時点での SSB 滞在者は 4 名。主訴として、眩暈、肺炎、食欲不振。本日は 2 名退所、2 名新規入所。]

#### 4月15日(金)

9 時に石巻赤十字病院災害対策本部にて、今回の支援活動の報告を行なった。

その後、午前中は七ヶ浜を視察し、夕方に栃木日赤支部へ戻った。(宇都宮市泊)

4月16日(土)

13:10 発の航空機で宮崎へ帰還。医療支援活動終了となる。

#### 【石巻市の現状と医療体制】

石巻市は今回の震災で最も多くの死者数を記録した。また、同市の医療システムは完全に崩壊しており、約 400 床を有する石巻日赤病院が最大規模の医療機関であった。他の医療機関は病床数 100~200 床の中小病院が 6~7 施設あるが、そのうちの一つの石巻市立病院は津波により壊滅的被害を受けていた。また、その他の施設も 1/3 が損壊、1/3 が機能停止、さらには町医院も診療を再開できる状態ではなかった。この事態を統括すべき県や市も状況の把握と対応が困難であり、東松島市と女川町を含めた石巻エリアについて、石巻日赤病院を中心とする日本赤十字社に任せざるを得ない状態となっていた。そのため、石巻日赤病院は自院のみでなく、市の医療を全て抱え石巻エリアの医療と再建に努めていた。

震災からひと月が経過し、石巻エリアの医療状況が少しずつ整い始めており、石巻日赤病院は本来の病院の職務に戻すべく救護班の宿泊場所の明け渡しや、短期的な経過診療を目的とした救護所の設置などの検討が行なわれていた。震災直後は約 60 の救護班が活動していたが、4/10 時点では 15 のブロックと 27 の救護班による医療支援の体制へと移ってきた。現在の救護班の役割として、①石巻日赤病院をはじめとした医療機関の支援、②避難所の巡回診療、③救護所における医療支援に分類される。

#### 【薬剤師としての活動】

薬剤に関して、被災された方々の中には定期薬をはじめお薬手帳も紛失している方も多くいらっしゃった。震災直後は、多くの医療スタッフが被災者から聞き取りを行ない定期薬の把握などに努めた。現在は市中の調剤薬局も徐々に再開しており、避難所の巡回診療時に定期薬の処方箋の交付を行っていた。

救護所は震災から約ひと月が経過する時期に立ち上がり、病院の一角を間借りして設営されていた。開設時には持ち込まれた薬剤が散乱した状況で、薬剤の分類や配置表の作成等に薬剤師は追われていた。また、全救護班の 1/3~1/4 にしか薬剤師が同行しておらず、救護所の薬品管理や被災者の薬剤管理については十分な状況ではなかった。そこで今回、救護所で活動を行うに当たり、救護所へ入所される被災者の多くが薬剤管理の乏しい状況であったため、薬歴と管理指導記録の作成に取り掛かった。薬歴については、初期診察を受けた石巻日赤病院からの診断書と入所者からの直接の聞き取りにより定期薬の確認を行なった。診断書に記載のある持参薬は現在服用している薬剤や、過去に服用していた薬剤、さらには記載規格が存在しないような薬剤など、決して正確な情

報とは言えない部分もあった。そこで時系列的に薬歴管理を行い、カルテファイルに薬歴を保管することで、他のスタッフにも現在の服用状況が分かるような環境を構築した。また、救護所において投薬された内服薬や注射薬についても併せて記載した。さらに薬剤師ではなく、医師や看護師でも対応しやすい記録形式になるよう努めた。退所時には薬剤情報提供資料として退所者に配布し、次回の医療機関を受診する際の資料とした。管理指導記録については、きっちりとした形式での作成までは難しかったが、入所者も3~4日と短期間の入所であることもあり、薬剤管理について気付いたことを中心にバイタルサインや食事の摂取具合などについて記録し、薬歴同様にカルテファイルに保管した。

### 【活動を通して】

強く感じたことは連携の大切さであった。救護班も日赤チームを始め、D-MAT、J-MAT や各医療機関のボランティア、薬剤師会と多くの医療スタッフが支援に来ていたが、始めに述べたように震災の被害状況の把握と救護班の統括が非常に困難であるように感じた。薬剤師として病院、薬局問わず連携し、情報を共有し支援に当たる環境が必要だと感じた。薬剤師会と日赤災害対策本部との取り組みにより連携強化が図られ、新しいシステムが構築されたことは薬剤師の支援体制にとって非常に大きなことであるとを感じる。私自身、他の救護班などから「薬剤師さん期待しています」、「薬剤師がいるといたないと随分違うよ」という言葉を受けた。それだけ薬剤師に求められることは多くあり、だからこそこのような状況での連携体制の構築が大切であると感じた。現在は既にチームとしての編成があるようだが、薬剤師のみの救護班の編成も必要であると強く思う。そのためには薬剤師のスキルアップが必要であり、血圧や心拍数の測定、さらには聴診を行なえるなどバイタルチェックへの取り組みも大切になると考える。しかしながら、このような想像もしえない大惨事において、現地の被災者やボランティアの力はとても強い絆を感じた。危険を顧みず撤去作業に当たる自衛隊、疲れを決して周りに出さない医療スタッフ。そして何より笑顔で復興に向かう被災者の方々。このような経験が出来たことは私自身の成長にも大きくかかわっていくことと思う。1000年に1度といわれる三陸沖の大地震と大津波。現状は想像以上であり、言葉も出さず思わず手を合わせていた。薬剤師だけでなく1人の日本人としてこれからも微力ながら惜しみなく力を貸していきたい。最後に、帰りに訪れた七ヶ浜で話をすることが出来た小学生の女の子と出会った。彼女の方から話しかけてきて、「ありがとう」と言葉をもらった。通っていた小学校は津波でなくなり、友達とも離れ離れになったという。それでも明るい笑顔で「がんばる」と言っていたあの表情が忘れられない。